

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリーナ

HALINA

no.49 2022年8月

【特集】
 balan gon banana が
映し出す世界

02 【ぽこぽこ 49】
ネグロスで見た星空と協同の力
◎伊藤 剛

03 【特集】
**バランゴンバナナが
映し出す世界**
「リジェクトバナナ」も民衆交易品
—ネグロスの産地から◎大橋成子
**規格外未利用バランゴンバナナを
見える化する**◎市橋秀夫
**規格外未利用バナナの可能性を拓く
協同労働の現場**◎下田寛典
福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金
バナナが媒介する
フィリピンと日本・福島
◎疋田美津子

09 【COLUMN】
【東ティモール見聞録⑥】
ワニの棲む池で5年ぶりの漁解禁
◎松村優衣子
【続まだまだ韓流⑥】
『ナビレラ — それでも蝶は舞う』
◎佐相洋子

10 【Topics】
01-「野獣」に乗って旅する人たち
メキシコ・レポート◎弘田しずえ
02-それぞれに「大切な生活」がある
—「新大久保に生きる人びとの生活史」を読んで
◎小島峻平

12 【PtoP“最新線”】
ネグロス連帯、民衆交易30年を映像で見る
—リニューアルしたATJウェブサイトから◎小林和夫

14 【Voice from APLA partners】
From Negros, Philippines
台風オデットからの復興が進んでいます。

15 事務局だより

16 【描っておきアジア】
フィリピン・ミンダナオ島◎石井正子

表紙のことば

インドネシアの京都と言われるジョグジャカルタ。その王宮の近くにあった工房で購入した手描きのパティックです。

全体を広げて見た時と、体に巻いた時の印象が異なり、巻き方によっても柄の出方が違うというデザインの構成力に、今でも驚かされます。

白状すると、工房で私が最初に選んだのは別の作品でした。でも、現地の友人の見立てはこちら。身に着けているとインドネシアの人に褒められることが多かったのも、彼女の見立てにしたがって良かったです。

あれからもう30年たちますが、洗濯を繰り返しても色あせることがなく、むしろ色が育ってきています。丁寧に作られた布の寿命は、人間より長いのだと実感します。

鮮やかさを保っているこの布と、年齢を重ねて色彩が変わってきている私。不思議と若い頃より似合うような気がします。友人の見立てのすごさを、あらためて感じているところです。(三村紀美子)

ネグロスで見た星空と協同の力

伊藤 剛／いとう・つよし

ワーカーズコープ連合会理事

ネ

グロス島のカネシゲファームに向かったのは、もう陽も暮れた夜のことでした。トラックの荷台にコトコト揺られた時のことは鮮明に覚えています。それはあまりに星空がきれいだったから。到着するまで夢中で夜空を見上げていました。

いま思えばワーカーズコープという協同組合で働くようになったのは、ネグロス島で協同組

合の存在を見つけたことと、グローバル経済に代わるあり方を模索してのことでした。

北海道のサリサリクラブに所属し、大学の仲間とネグロス島へ。農村、漁村で暮らす人たちから聞いたり言われたりしたのは「日本は大丈夫か？」という孤独死の話、日本資本による開発や「日本の船がルールを守らず魚を取っていくんだ」という現実。

プラスチックにあふれるスモークの光景。2022年の今も減ることなく、覆い尽くすほどになつてしまつて海はプラスチックのスープになりました。根本問題のこのグローバル経済をどうするか、どう仕組みを変えられるのだろうか。ヒントとなったネグロスの養豚の協同組合は農民へ親豚を貸していました。農民は親豚が無事に子豚を



産んだら協同組合に返します。人びとが自立でき、地域で循環できる良い仕組みをつくっていました。

そこから私は社会を変えられそうなワーカーズコープを選んだ。数十年前。その後、働きつつAPLAとの接点をどうつくるかは長年の懸案でした。これが昨年以來、規格外未利用バランゴンバナナをワーカーズコープ内で活用することになりました。このバナナは子育て現場で子どもの育ちに大変役立っています。バランゴンバナナはどこから来て、どんな経緯のバナナなのかを小学生が研究。規格外？ 未利用？ なぜフードロスが起きるの？ 疑問がたくさん。バナナを救いたい、という想いが形

になり小学生たちは「子どもバナプロジェクト」を結成しました。小学生でも社会を変えられると実感。

最後に2022年は記念すべき年なんです。ワーカーズコープの法律(労働者協同組合法)が10月1日に施行されます。3人集まつて力と心をあわせればワーカーズコープ法人が出来ちゃうことに。社会問題に向き合つたり、持続可能な地域のため。必要な仕事は、ワーカーズコープを立ち上げて仕事で解決する。1人1票の話し合いを基本にする、日本でも働きたの民主化のはじまりです。星空のように無数に協同が生まれることを願っています。■

特集

バランゴンバナナが映し出す世界

フィリピンと日本の民衆・市民の手によってバランゴンバナナが初めて日本の食卓に届くようになつてから30年以上が経つた。『無農薬バナナ』の草の根貿易はただの『おいしいものの輸入』ではない『アジアを台所に持ち込み、台所からアジアを見る、それが草の根貿易なのである』——これは、オルター・トレード・ジャパン(ATOJ)初代社長の故堀田正彦氏の言葉であるが、民衆交易の開始当時から社会の様相が大きく様変わりした現在もなお、思考そして行動を続けよ、と呼びかけているようだ。単なる「おいしいもの」にとどまらないバランゴンバナナがつかう関係、映し出す世界を見つめてみたい。(編集部)



「リジェクトバナナ」も民衆交易品 —ネグロスの産地から

大橋成子／おおはし・せいこ

APLA理事、ピープルズ・プラン研究所運営委員

ネ

グロス島の山間部で収穫されたバランゴンバナナは、陸路・

海路の長い旅を経てようやく日本の食卓に届けられる。この旅の過程では、品質管理というバナナにとって「検問所」のような関門をいくつも通過しなけれ

ばならない。

最大の難関は熟度管理

まず、山の産地から農民が運んできた集積場での買い取り時の選別、次にパッキングセンターで箱詰めされる時の再検査、フィリピンの港、そして日本国

内のリパックセンターで小分けされる時と、何段階もの品質管理をクリアできなければ、バナナは消費者の待つ食卓まで到達できない。この過程で、規格外

のためどんなにじかれていくバナナを見ると、農民たちの苦労が思い出されて、何ともいたたまれない気持ちになる。しかしこれだけはどうしようもない。日本には、バナナは未熟のまま輸入しなければならぬという厳しい検疫制度があるからだ。熟して柔らかくなった皮を通し

て害虫などが日本に侵入することを防ぐためだ。

刈り取ってから追熟し続けるバナナの熟度管理は、32年前に民衆交易が開始された当初、最大の難関だった。現地では青く固いバナナでも、日本の港に到着すると熟しすぎて真っ黒になつてしまつていくという経験は何度もした。逆に日本が気温の低い冬になると、港にあるムロで追熟させても委縮して一向に熟さず、昔の消費者は「新聞紙にくるんでこたつの中で温め

た姿を思い出す。

あれから32年たった現在、バナナ産地も増え、民衆交易のシステムも大きく改善されたが、それでも廃棄されるバナナをどのように活用するかという課題をフィリピンでも日本でも抱え

ている。少しでもロスを防ぐために、ネグロスでは現在どのような取り組みがなされているのか、現地のオルタートレード・フィリピン社（ATPI）で30年間バナナを担当してきたレイさんに話を聞いた。

良いバナナは土づくりから

品質管理の最初の関門となる産地の集積場では、山の農民が持ち込んだバナナをATPIの担当者が選別した後に買い付けが始まる。専用の道具で、長さ13・2cm、太さ2・7cm、そして十分な丸みがあるかを検査する。この基準を満たさないものは、熟度が足りないために、日

本での追熟がうまくいかない可能性が高い。

昔から農民たちの交流の場にもなっている賑やかな集積場だが、「リジエクト！」という声が飛び交う買い付けの場面では緊張が走る。不合格・廃棄という意味の「リジエクト」はバナナにとってはなんとも可哀そうな呼び名だが、農民たちが一喜一憂する光景は昔から変わらない。ここでリジエクトされたバナナは生産者に戻され、熟しそうなものは市場で販売し、固いバナナはほとんどの場合、煮て豚や家畜の餌に活用している。立派なバナナを育てるためには、まず土づくりが肝心だとい



花を落とすタイミングで色の異なるリボンを付けることで、最適な収穫時期を逃さないような仕組みを作り上げた。

う。鶏糞などの肥料入れ、成長段階に合わせた世話や葉の剪定、収穫時期を管理する方法を徹底することで、はじかれるバナナは少なくなり、生産者の収入につながる。ATPIの産地担当者が定期的に生産者を訪問し、問題解決にあたっているそう。

産地からパッキングセンターに輸送されたバナナを第2の関門が待っている。水洗いの際、品質管理の熟練スタッフが正確に軸を切り取り、基準の大きさに満たないバナナを見逃さず、再度チェックする。この段階でリジエクトされたバナナは、箱詰め作業の労働者たちに安価で売られ、彼らの副収入になっている。子どもたちが好きなバナナケーキには豊かな香りがするパラゴン種が欠かせないという。

ATPIでは、リジエクトバナナをスライスしてチップスに加工し、マスコバド糖をまぶしたり、ガリッククやチリ味など数種類のバナナチップスをフィリピン国内で販売してきた。かつて私がネグ



集積場での買い付け時に使う太さをチェックする道具。

ロスに滞在していた頃は、ATPIの会社の近くにあったスラムの行商人に、バコロド市内をリアカーで売り歩いてもらっていたが、「サバ（バナナの品種）はよく売れるが、パラゴンは高く売れないなあ」とつぶやいていたのを思い出す。チップスにしても生食にしても、現地では他の品種が愛されていて、パラゴン種はあまり見向きされな

各産地のパッキングセンターでの廃棄率は、3%から10%を維持しているという。産地での土づくりや栽培方法の改善がこの良い結果に結びついている。これは昔なら考える余裕もなかったことだ。お金のためにはどんなバナナも出荷していた山間地の農民たちが、農業に向き合っている。価値観を変えてきたことこそ、これまでの30年間で積み上げてきた経験や努力の賜物だと思える。つくづく思う。「廃棄」されるバナナさえ「民衆交易品」として、現地でも日本でも無駄にしない努力を続けていきたい。■

規格外未利用 バランゴンバナナを 見える化する

市橋秀夫／いちほし・ひでお
APPLA共同代表、埼玉大学教員

フィリピンから日本に輸入されるバナナのサプライチェーンに

ついては、鶴見良行さんの『バ

ナナと日本人』岩波新書が1982年に刊行されて以来、大きな関心が持たれてきた。オルタートレード・ジャパン（ATJ）もAPPLAも、そのところは強く意識し、問題や課題をたびたび訴えてきた。しかし、このサプライチェーンの流通過程で

生じる「食品ロス」という問題については、最近まで真正面から取り上げる課題とはなっていなかったといえる。

筆者自身、プランテーション・バナナのオルタナティヴたる志がこめられているバランゴンバナナについても、産地で生産者から集荷される際に出る「リジエクト・バナナ」サイズ、品質などが規格外で買取できないバナナ（存在や、パッキングセンター



リパック作業を経て規格外となったバナナを計量。



選別され、コンテナに詰められた規格外バナナ。

での検査時やマニラで船積みされる前の再検査でふたたび「リジエクト」されるバナナが一定量出ていることは知っていたが、それは「食品ロス」の問題ということではなく、もっぱら、栽培方法や運搬過程を改善することで減らす対象という位置づけでとらえてきていた。そのため、現に出てしまう「リジエクト・バナナの活用」という観点は持てていなかった。

規格外未利用バナナの活用のための試行錯誤がスタート

輸出前のみならず、日本に輸入されてからも、購買者に届く前の段階で「規格外バナナ」が

出ていることを知ったのはさらに最近のこととなる。生協や食品宅配事業者などの小売先に卸す段階で出てしまう「規格外バナナ」である。フィリピンにおいて3段階の「リジエクト・バナナ」が存在するとしたら、これは4段階目が出る「リジエクト・バナナ」ということになる。

輸入されたあと生協などの食材小売先にリパックされて出荷される段階で生じる規格外のバランゴンバナナは、輸入量全体の6〜7%になる。ひと口にバランゴンバナナと言っても、究極の画一化された管理栽培がおこなわれているプランテーション・バナナとは異なり、バランゴ

ンバナナの産地は土壌の質や日当たり具合など、非常に多様である。農家の栽培技術にもバラツキがあり、一房ごとに個性は大きく異なっている。そのため、輸入後の追熟加工を受けたバナナは、熟成が早く進んでしまったり、逆に熟成がうまくいかなかったりするバナナも出てくる。もちろん、繰り返し送られる積み替えの過程で、房の外側に位置するバナナは概して傷などのダメージを受けやすいということもある。規格外となってしまうのは、致し方ない面がある。しかし、規格外バナナは、未利用のままでは、やがて廃棄バナナとなってしまう。一部は「加工用バナナ」として、ケーキ屋さんなどに販売されている。それでもなお、利用しきれない相当量のバランゴンバナナが出てしまい、それらは廃棄業者に有料で引取ってもらい、廃棄されてきたのである。

関東のリパックセンターの協力で、規格外バナナが出る現場を実際に見学させてもらうなどして、十分に利用しうるバナナがそれなりにあることも分かった。これらを活用できれば、食

品ロスの削減にもなるし、有料で廃棄してもらっている費用も節減できる。フィリピンの小規模零細バナナ生産者や、食品の安心・安全問題など、無農薬で栽培されているバランゴンバナナを考えてもらうだけではなく、食をめぐるその他の様々なグローバルな課題についても、会話を巻き起こすことができるのではないか。保育園や学童、フードバンクなど、活用してもらえそうなところに、とりあえず声

をかけて始めてみよう……。そんなことを話し合いながら、試行錯誤を前提に、また情報を広く共有すること自体もプロジェクトの目標の一つとして、規格外未利用バナナの活用に取り組む「ぼこぼこバナナプロジェクト」は2021年夏にスタートした。

バランゴンバナナと持続可能な開発目標

少しふりかえってみると、

規格外未利用バナナの可能性を拓く 協同労働の現場

下田寛典／しもだ・とものり
APLA会員／合同会社PLC

規格外未利用のバランゴンバナナを活用する首都圏のとある学童クラブを訪れた。今回、その学童クラブを協同労働という形で運営する事業者のスタッフの方から話を聴くことができた。規格外未利用のバランゴンバナ

ナはこの地域のどんな課題と出会ったのかをレポートする。なお、本稿の趣旨は、この地域の課題を指摘することではない。バランゴンバナナの生産を通じて自立を目指すフィリピンの農民と、経済発展の成熟に伴う新たな課題を乗り越えようと

協同労働に励む日本の人びとの邂逅を、規格外未利用バナナが拓こうとしている「現在地」を、お伝えするものだ。

アーバン・エリアに立つ学童クラブ

本題に入る前に、まずは同地域の成り立ちに触れておきたい。東京オリンピック開催の1964年に始まった第1期埋め立て工事、そして、1972年、高度経済成長期の真っ只中に始まった第2期埋め立て工事により、住宅街が形成された。1970年に約2万人だった人口は、1

には、「2030年までに小売・消費レベルにおける世界全体の一人当たりの食料の廃棄を半減させ、収穫後のロスを含む生産およびサプライチェーンで出るフード・ロスを減少させる」と書かれている。この項目の後半部分が、バランゴンバナナの流通過程で生じる規格外バナナについて直接当てはまる。

リサイクルの推進、自然に合致した持続可能なライフスタイルの情報共有と意識化、なども明記されている。特に、12の「2030年までに、世界各地のすべての人びとが、自然に調和した持続可能な開発およびライフスタイルに関わる情報と意識を、確実に持つようにする」とある点は重要だ。APLAも積極的な「情報共有」と「意識化」の取り組みをしていきたい。■



椰子の木が並ぶ道路の奥に広がる住宅地。

987年には10万人を突破。2020年には17万人を超える街

に成長した。
今回取材した学童クラブは、第2期埋め立て地に位置し、大規模な商業複合施設と高層マンションがそびえ、道路沿いに椰子の木が並ぶアーバンリゾート風の街だ。

経済的な豊かさの影にある 子どもの孤立

2013年、この学童クラブに通う児童は全校生徒約320人のうち僅か34人だっ



学童の運動会の日、来場者に廃棄されてしまうバナナのことを伝えるために掲示された手製のポスター。

た。部屋に集められ、「つまらない、早く帰りたい」と呟きながら保護者の迎えを待つ子どもたち。その保護者は高層マンションを購入した高所得者層だ。共働きで自分のキャリアも守りたい保護者は夜遅くまで働く。迎えに来るのは遅く、学童クラブに來ない子どもたちも、塾や習い事に忙しい。お金が家に置かれていて、「これで食べておきなさい」「これで好きなことをしなさい」といった生活が日常だ。お金には不自由なく、身なりもきれいな子どもたちと接していると、一見して何に困っているのか分からなかった、と事業所のスタッフの方が話してくれた。

この学童クラブの特徴は、学童クラブにまつわる様々なモノ・コトを人任せにしない姿勢だ。その一例が学童クラブで提供するおやつに表れている。それまで業者から仕入れていたおやつはパターンが決まっていた、舌の肥えた子どもたちはなかなか食べなかった。夜にお腹が空いたと聞いた親から、「どうなっているんですか!？」という声が届き、自分たちで作ることにしたのだ。予算は1つ100円。季節のことも考えて、夏は素麺、

冬はラーメンなどスタッフが意見を出し合い工夫した。すると、業者のおやつを食べなかった子どもが何回もおかわりする姿を目にするように。おやつを食べながら「みんなと食べるとおいしい」と呟いたその子の声に耳を傾けてみると、「家ではいつも一人で食べている」家にある食べ物やレンジでチンするんだ」といった声が聞こえてきた。気づいたのは子どもたちの孤立だった。

おやつの際は長期休みの給食だ。それまで業者から弁当を仕入れていたが、全学年同じメニューで同じ量。当然食べ残しが出た。それだったら、と始めたのが自前の給食だ。ある日、ラーメンを出した。普段、高級ス

ーパーの握り寿司を弁当代わりに持つてくるような子で、親からも「うちの子は、ラーメンは食べません」と言われていた。その子が3回もおかわりをした。どんな高級料理より、誰かと一緒に食べる時間こそ、子どもたちが欲しているものだった。

一人の困り事はみんなの困り事

活動は加速する。一人ひとりの子どもたちを見るように、その眼差しを保護者に移していった。

ある日、いつもより元気のないお母さんの顔が見えた。「どうしたの?」と声をかけると、「子どもの迎えを理由に会社の飲み会を断っていたら今日は誘



バナナとの相性が良いのは塩ラーメンのみ、しょうゆや味噌はNGとのこと。

人がつながることに震えを覚えた」と話してくれた。
与えられるのではなく自分でつくる協同労働
学童クラブで展開される様々な活動を貫くのは、協同労働の「一人一人が経営者」という理念だ。誰かに任せるのではなく、必要な活動なら自分たちで興す。その理念と推進していくパワーは、子どもたちにも伝わっているようだ。
現在、規格外未利用バナナは学童のおやつとして活用されるほか、子どもたちの研究の題材になっている。テレビで話題になったバナナアートに挑戦することになり、最近ではバナナラーメン(バナナをトッピングした塩ラーメン)やバナナの皮のチーズ焼きなど、その発想の拡がりには大人顔負けだ。
遊びも学びも誰かに与えられるのではなく、自らが創り出す。今では140人が通うこの学童クラブで子どもたちは今日もまた、創造の翼を広げている。フィリピンから旅してきたバランゴンバナナが出会っているのは、どこまでも前向きに試行錯誤を繰り返す協同労働の現場だ。■

東ティモール見聞録



06

松村優衣子／まつむら・ゆいこ
通訳

ワニの棲む池で5年ぶりの漁解禁



合図を聞いて一斉に池に入る人たち。

東ティモールの南海岸に面する地域のひとつ、マヌファヒ県アラス郡に、ペー・カスファールという汽水池があります。池から海までの距離は約5メートル。池にはイリエワニが生息し、伝統的に禁漁区とされていましたが、3年に一度、2日間だけ漁が解禁されます。その時は、誰でも好きなだけ魚を捕ることが出来るため、地元の人たちだけではなく、隣県からも人が集まります。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大予防のために開催が2年間延期され、感染拡大が落ち着いた今年5月に5年ぶりの開催となりました。

東ティモール人の夫と私は、アラス出身の親戚に誘われて首都デシリから参加しました。現地に着いてみると、約300人の老若男女が投網やたも網を手に、漁が解禁される瞬間を今か今かと待っていました。進行は、この地域の氏族の長とその親族が担います。精霊への祈りを捧げ、水路を掘って池の水を海へ流します。水位が半分以下に下がったところで、長の合図とともに参加者は一斉に池に入り、魚を捕り始めます。

私はワニが恐いため、池の端に立つのが精一杯でしたが、私以外は誰もワニを恐がる様子がなく、「今晚のおかずだ！ 沢山捕って帰るぞー」と大張り切り。参加者の多くは、グバン椰子の葉を割いたものを頭や腰に巻いていました。そうしている、ワニの目にはその姿が映らないのだとか。結局、本当に誰もワニに襲われることはなく、ワニとヒトが恵みを分かち合う共生の様子を見ることが出来ました。私たちが捕まえたのは、15センチ前後の小物ですが、20匹程捕まえたので初参加にしては上出来です。夫の実家がアラスの西隣のサメ郡にあるため、捕った魚を持って行くと、義母がウコンやレモングラスで臭みを消して美味しく料理してくれました。

池の水を海へ流すために掘った水路は、放っておくと波に運ばれた砂で自然に塞がれるのだそうです。3年後には、また沢山の魚が育っているのだと信じて。

東

日本大震災による福島原発事故が発生した年の11月から始まった「福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金」も今年で11年目を迎えた。これまで、様々な伝手を辿って balancon バナナを定期的に届けてきた福島県内の保育園・幼稚園は30力以上にのぼる。バナナ産地の自然災害などで供給量が低下したり、バナナ募金の集まりが鈍くなつて送る回数が減ったりする時期はあったが、現在でも毎月80キロ以上のバナナが送られている。

バナナの届け先の園との交流もずっと続いてきた。お寺の一角で保育園を運営している二本松市の同胞幼稚園は、住職自ら園周辺の除染作業に汗を流し、事故後数年間にわたり、全国から送られてくる安心できる野菜等を定期的に保護者に無償で提供する「青空市場」をお寺の境内で開催した。「ここにも balancon バナナは送られた。訪問時には「青空市場」を運営する保護者のボランティアの方々と車座で話をしたが、「福島のことを忘れないでほしい」という言葉

【福島の子どもたちに届けよう・バナナ募金】

バナナが媒介する
フィリピンと日本・福島疋田美津子／ひきた・みつこ
APLA共同代表、しらたかノラの会

は、APLA からキッチンカーが出動したこともある。訪問するたびに子どもたちと一緒に給食をこちそうになつて南相馬市の原町聖愛こども園。APLA のスタッフが動画やスライドを見せながらバナナの話をする、口を開けたまま話に吸い込ま

が頭に残っている。福島市の郊外にあるあすなる保育園には、フィリピンのバナナ生産者が訪問したこともある。バナナを楽しみに待っている園児たちが、災害でバナナが被害に遭ったことを聞いて、バナナ生産者に干羽鶴を送った。この園のお祭りに

残っているだろうか。2011年3月の東日本大震災と福島原発事故は、それまでのAPLAの基本的なものの見方を問い直す大きな出来事だった。すでに非正規雇用の拡大や貧困問題など、日本の社会自体の窮状が明らかになりつつあったところにこの事故が発生し、日本の社会のあり様にとどのように向き合いつつ、アジアの人びとどのようにつながっていくかが問われた。日本とアジアの「媒介者」たらんとするAPLAは、媒介する両側へのまなざしをより深くしなやかに持ち続けることが必要なのだろう。ネグロス島の飢餓に苦しむ子どもたちを救う活動から生まれた balancon バナナが、福島の子どもたちに何をもたらすがわかるのは、ずっと先のことである。

園から届いた子どもたちの絵



続 まだまだ 韓流

06

佐相洋子／さそう・ようこ
KAJA 会員

筆写撮影。

ドラマ『ナヒレラ』(2021年)は視聴率こそ高くなかったが、老人ドクチュルと若者チェロクの感動的な成長ドラマとして関心を集めた。魅力的な登場人物、印象的な場面・台詞があふれている。

『ナヒレラ』は一言でいうと、70歳にしてバレエを始めたドクチュルと、23歳にしてさまようバレエダンサー・チェロクが共に反発しながらも刺激し合い成長していく物語である。ドクチュルは子どもの時からずっとバレエダンサーになることを夢見ていた老人、誰にも話せず出来ることだとも考えていなかった、チェロクに会うまでは！ チェロクはバレエに集中できず夢にも挫折していた、ドクチュルに出会うまでは！

『ナヒレラ』は普通の人びとの夢についての物語であるが、誰でも一度は蝶のように飛び上がろうとし、強い意志と努力があれば飛び上がれることを教えてくれる。

最終話ではそれぞれ夢を実現した二人が踏切をはさんで向き合う。そして、最後に視聴者へのメッセージが流れる。「今でも遅くありません。70歳のドクチュルがそうだったように、あなたにもできるのです」と。

『ナヒレラ』は若者に、老人に、困難なことに諦めずに挑戦していく勇気を与えてくれる、感動的な「人生応援歌」である。

連載コラム『続まだまだ韓流』は今回で最終回だが、韓流はドラマも映画も元気にパワーアップして続いている。最近では、私の最も好きなノ・ヒギョン作家が「私たちのフルー」という傑作を届けてくれた。まだまだ「韓流の泉」は尽きそうにない。

「野獣」に乗って旅する人たち メキシコ・レポ。ポート

弘田しずえ／ひろた・しずえ
ベリス・メルセス宣教修道女会、APLA名誉顧問

メキシコ南部チアパスから出発し、米国国境に向かう貨物列車は、「野獣（ラ・ベスティア）」あるいは「死の列車」と呼ばれ、主にホンジュラス、エルサルバドル、グアテマラの移民を乗せてメキシコを縦断する移動手段として、年40万から50万人が利用しているといわれます。2キロにも及ぶ列車にしがみついて旅するわけですが、振り落とされる危険、たとえ生命が助かってでも取り返しのつかない障がいや重荷、さらに有り金を全てはたいて旅する人たちを餌食にする犯罪集団の危険などにあふれています。

人間として、人間らしく

2022年2月の終わりにメキシコに行き、ワイチャパンという町にあるシェルトーを訪問して聞いた話は、死に直面し続けている人たちの凄まじいドラマでした。なぜ、それほどの危険を冒しても米国に行きたいのか。中米の国々の貧困に加えて、「マラス」と呼ばれるギャング集団が、日常的な暴力によって、一般市民のいのちを脅かしています。「これ

以上、そこで生活していたら確実に殺されるのが分かっていたので、国を出た」という言葉は、一人ひとりに当てはまります。シェルトーで出会ったホンジュラス人は、「公認会計士の免許を持ち、教師の資格も持っているが、ゲイであるため就職ができないだけでなく、殺される危険があったのでメキシコに来た」と話していました。

「巡礼者の家」と呼ばれるシェルトーは、誰でも温かく迎え、食事、宿泊、シャワー、着替え、医療を提供しますが、何よりも

死に向かう列車

ただ一つ方向に進む
逆境の中で進む
喜びは幸福であることを無視する
嫌な思い出を大切にす

非常に特異な乗り物に乗っている
苦い思いを抱きながら
不道徳と思わないものは受け入れる
ある人が大切にしているものに唾を吐く

列車に乗る
ゆっくりと死に向かって
列車に乗る
彩られた死
運命を決めるのは私

死の列車
これは儀式だ
震え上がる死への列車
傷つくことはない

(訳：弘田しずえ)

中米の国々で、ラ・ベスティアについて複数の歌が歌われています。作者も不明ですが、SNSに流れている曲で、苦しみの底からの叫びに聴こえます。



Central Americans Undertake Grueling Journey Through Mexico To U.S.
(Photo Credit: John Moore/Getty Images).

に「人を助けるのではなく、お互いに人間として出会い、生きることの本当の意味を確認できる有意義な関わり」の場」として、奉仕を続けているという言葉が印象的でした。

過酷な現実から 「もう一つの世界」へ

現在、メキシコの政治、経済、社会の現実を根底から揺さぶっているのは、麻薬密売組織の存在で、米国内に流入する外国製麻薬のおよそ70％にメキシコの麻薬カルテルが関与しています。社会のあらゆるレベルに根深く存在し、地方自治体の75％、あるいはそれ以上が麻薬カルテルの支配下にあるといわれています。メキシコのイエズス会経営の大学教授から現状について話を聞きましたが、「なぜ政府が現状を変えられないのか、無力だからか、やりたくないからか、癒着しているからか？ 答えは三つとも」という説明でした。

5月1日からメキシコ・シティで世界社会フォーラムが開催されましたが、このような現実だからこそ、「もう一つの世界」にコミットするパワフルな人びとがメキシコにも確実に存在していることが希望だと感じています。■

それぞれの「大切な生活」がある ——『新大久保に生きる人びとの生活史』 を読んで

小島峻平／こじま・りょうへい
朝オムター・トレード・ジャパン商品部

JR山手線の新大久保駅から大久保通りを東へ歩くと、韓流中心のアジアンタウンが広がっている。ハンダで表記された看板が多く、韓国料理レストランやカフェ、韓流スターグッズ、コスメを取り扱う店が乱立している。東南アジアの食料雑貨店やレストランもちらほら見かける。耳をすませば、とにかく様々な外国語が聞こえる。中国語や韓国語に至っては日本語より聞こえるほどだ。新大久保は雑多で楽しげな街だと思ふ。ちなみに、新大久保駅を出て線路沿いに南北に伸びる路地や西へ歩くと、東南アジアや南アジア、イスラム系の店舗の比率が高くなり、アジアンタウンという印象をより強く受ける。私が初めて新大久保を訪れたのは、2021年9月、オルター・トレード・ジャパンへ就職面接に行くためだった。大久保通りを緊張しながら歩いたことを覚えている。名古屋駅から2時間、何か遠いところに来た気がしていた。

目線を上にあげて街を観察する

初めて本書を手にとった時、私は『新大久保に生きる人びとの生活史』の「生活」という単語に若干の違和感を覚えた。新大久保という、自分が「観光名所」だと思っていた場所に生活する人びとのイメージが持てなかったからだ。しかし、本書を読み、新大久保の通りを観察することで、自分がいかに観光客の視点に立ち、新大久保の多様性や生活者の存在を看過していたかに気づいた。以下にその

一例を紹介する。

本書(74／75頁)に街歩きのポイントが数点紹介されている。最初のポイントとして「自分と同じ目線の高さばかりではなく、たまには目線を上にあげて、建物の2階以上に何があるかを確認してみる」とある。実際に目線を上げて観察してみると新大久保の様相は大きく変わった。観光客用のショッピング街としての印象が強い新大久保の街だが、2階以上に目を向けると、カフェやレストランの看板と共に、送金施設や語学学校、不動産屋が散見されるようになる。なるほど、新大久保には外国人が生活するインフラが混在しているようだ。

ちょうど語学のレッスン費用をフィリピンへ送金する予定があったので、いい機会だと思い大久保通りにある送金施設を利用してみた。カウンターでは中国系のスタッフとヨーロッパ系の客が日本語で話をしていった。また、その送金施設は印刷屋も併設しており、その時は中国語の1辺2メートルを越える大きなポスターを印刷していた。新大久保はコリアンタウンではなく多国籍タウンであることや観光客以外にも様々な人びとが生活していることを実感した瞬間だ。

隣人の大切な生活

新大久保ではないが、私の隣の部屋に住んでいたネパール出身の男性の話をしたい。彼と初めて話をした時、彼は引越しの最中で、玄関前から道路ぎりぎりまで彼の家具や所持品を積んでいた。彼も1人暮らしだと思っていたが、所有物の中におもちゃも積まれていたため、不思議に思っただけでみると、「日本にいるが別居中の子どもと遊ぶためにとつてある」と嬉しそうに教えてくれた。私たちの部屋の間取りは5畳のワンルームで押入れなど収納スペースはない。机と布団で部屋のちようど半分が埋まってしまふほど狭い。それにも関わらず、わざわざおもちゃを取っておくのだから、彼にとつて子どもとふれ合う時間は本当に大切なはずだ。

私は留学生として計1年半ほど海外にいたが、自分は好きで海外に来ているのだから本当に困った場合には日本に帰れば済むと考えていた。この考え方を日本に暮らす外国人にそのまま当てはめていたわけではないが、彼・彼女らの事情や生活者として日本にすることに對して理解が欠けていた。本書のタイトルが『新大久保に生きる人びとの生活史』であるように、彼らも海外にルーツを持ちながら日本で「生活」をしているのだ。■

(注)大通り沿いの1階にも宗教施設や食料雑貨店などのインフラが存在する。

ネグロス連帯、民衆交易30年を 映像で見る

——リニューアルしたATJウェブサイトから

小林和夫／こばやし・かずお

(株)オルター・トレード・ジャパン 広報室

PLAの前身である日本
ネグロス・キャンペーン
委員会(JCNC)が発足

したのが1986年、(株)オルター・ト
レード・ジャパン(ATJ)設立は19
89年です。ネグロス連帯や民衆交易
の歩みも30余年となりました。この間、
JCNC、APLA、ATJは活動・
事業を広く伝えるため、さまざまな文
献や映像を自主制作してきました。

このたびリニューアルしたATJの
ウェブサイトで主要な文献と映像を紹
介するページを設けました。自主制作
した文献はPDFで全文が読めるよう
に、映像も全編自由に視聴できるよう
にしました。また、YouTubeチャ
ネル「PR ATJ」では、産地のパート
ナー団体が制作した動画も見られます。
ここでは、特におすすめの映像作品4
点をご紹介します。

1 ネグロス——苦い砂糖の島

(1986年、JCNC制作)

「砂糖は甘い。それで儲ける者にと
ってはさらに甘い。しかし、それを作

られる者にとってはあまりにも苦
い」という含蓄に富む言葉でこの動画
は始まります。ネグロス島で1980
年代半ばに発生した飢餓は、サトウキ
ビのモノカルチャー(単一栽培)やハシ
エンデーロと呼ばれる一部の大農園主
が土地を独占する大土地所有制という
構造的問題が引き起こした人災である
ことを明快に語っています。時を同じ
くして起きた20年に及ぶマルコス独裁
政権に反対し民主化を求めるピープル
パワーの様子も映し出され、時代の熱
気を感じさせます。なぜネグロスとの
連帯運動が始まったのかを知ることの

できる必見のビデオです。

2 バランゴンとバナナ村の人々

(1992年、ATJ制作)

バランゴンバナナの民衆交易は、ネ
グロス中央にそびえ立つカンラオン
山(標高2465メートル)の中腹にある
村々、通称バナナ村から始まりました。
動画は生産者バテルナ家の出荷日の一
日を描き出します。重いバナナを天秤
棒で担いで山道を越え、川を渡り運び
出し、洗浄・箱詰めをして出荷します。
その様子はまさしくATJロゴにもあ
る「人から人へ 手から手へ」を彷彿
とさせます。よくぞこうした山間地か
らバナナを日本まで輸出しようと考え
たのだと、産地の人びとの意気込み
と努力に圧倒される作品です。同時期
に制作された音声付きスライドショー
「海を越えたバランゴン」、ブックレッ
ト『台所からアジアを見よう(初版及び
第二版)』もあわせてご覧ください。

3 バランゴンバナナが届くまで

(2021年、ATPI制作)

30年たったバナナ産地は、現在どう
なっているのでしょうか。この動画は、
コロナ禍でなかなか現地へ足を運べな
い状況のなか、生産者の様子を日本の
消費者に伝えたいとオルター・トレ
ード・フィリピン社(ATPI)が制作し
たものです。登場人物の一人、マルク



自主制作した動画リスト(リニューアルしたウェブサイトより)。

ス・アビラさんはネグロス東州カンラ
オン地域で1000株のバナナを育て
る生産者。バナナの収入で11人の孫を
可能な限りサポートしたいと語ります。
株の植付けから除草、枯葉除去、袋掛
けや収穫まで、丁寧な作業に良いバナ
ナを育てようとする意欲が伝わってき
ます。バナナの運搬やパッキングセン
ターでの作業風景、垣間見られる家や
村の様子など、30年前の映像と比べて
みるのも一興です。

4 インドネシアでエビが育ち 日本に届くまで

(2021年、ATINA制作)

ドローンで上空から映した広大な養
殖池の映像から始まるこの動画では、
養殖池と加工場での工程を紹介してい
ます。乾季に池の水を抜いて、耕耘機
で耕したり、酸性土壌中和のため石灰
を散布したりする作業は、養殖という
より有機農業を連想させます。粗放養
殖と聞くと何かほったらかしにしてい
る印象を与えますが、実際には生産者
はpH、塩分や酸素濃度を測定して、最
適の生育環境を整えていることがわか
ります。収穫後の徹底した温度管理、
加工場内での品質管理も一見の価値あ
ります。

他にもまだまだ面白い新旧の動画が
たくさんあります。新しい発見あるこ

と間違いなし! また、新しいウェブ
サイトは、味の特徴やレシピなど各商
品の食材としての魅力を伝えるコンテ
ンツを多数揃えています。目と耳と口
で民衆交易商品の魅力を満喫してくだ
さい。 ■

●ATJウェブサイト

<https://altertrade.jp/>

●映像紹介ページ

<https://altertrade.jp/aboutus/movies>

●YouTubeチャンネル

「PR ATJ」各ページ下部にある次の口
ゴからお入りください。



初出張の思い出

インドネシア◎甘い思い出

初めてのインドネシア出張。
夕ご飯を食べに行こうと誘わ
れて向かったのは、「ここで
食べて大丈夫か?」と思うよ
うな屋台。店先にはなにやら
「M」ではじまるメニューが



「禁断の食べ物」マルタバ。

書かれているが、初めて見る
単語で分からない。ただ、と
ても甘い匂いが立ち込めていたので「これは絶対においしいもの
だ」という確信だけはあった。「アパイニ? (これはなんです
か?)」と覚えたてのインドネシア語できいてみたら、「マルタ
バ」だよと教えてくれた。早速出来立てのマルタバを食べてみ
ると、パンケーキみたいで、贅沢にバター、砂糖、チーズを使
って最高の味でした。後から知ったのですが、今回食べたのは
「マルタバマニス」と呼ばれるもので、甘いもの好きにとって
はたまらない「禁断の食べ物」としても知られているそうで。
(上田誠)

フィリピン◎人気のスポーツ

初めてのフィリピン出張の道中、バスケットボールコート
をよく見かけました。街中はもちろん、産地のある農村部やマス
コバド糖製糖工場の敷地内にも、至るところにありました。フ
ィリピンは、米国の植民地だった影響からか、世界的にも屈指
のバスケット人気国のようです。日本では、バスケットは主に屋内ス
ポーツですが、フィリピンは、屋外でやるのが主流のようです。
見かけたコートは手づくりのものが多く、フィールドも平らと
は限りませんでした。それだけにフィリピンの人びとのバスケット
に対する情熱が感じられ、彼らにとって生活の一部なのだと感じ
ました。蒸し暑い環境でかつハードなスポーツなので、プレー
イ中、熱中症になるのではないかと内心心配しつつも、バスケット
ができれば、すぐに現地の人と仲良くなれたのでは、と残念に
思いました。(中村智一)

こんなことが
あったんです!

スタッフが語る出張こぼれ話



「バランゴンバナナが届くまで」より。



「インドネシアでエビが育ち日本に届くまで」より。

今年6月8日、駐日フィリピン大使が日本の小売業者に対してフィリピン産バナナの小売価格の値上げを要請するという異例の会見が開かれました。ネグロスの飢餓救援と自営農民の支援、そしてプランテーションバナナのオルタナティブとしての意味を持って始まったバランゴンバナナの民衆交易の30余年の歩みの裏(表?)では、生産現場における搾取によって成り立ってきた「安いバナナ」は変わらずに存在していました。大使が会見で「現状を継続するのは、フィリピンのバナナ生産者にとって、現実的ではなくフェアでもない」と述べていますが、実際に、農園や梱包工場で働く人びとからは長年にわたって状況の改善を求めるSOSの声が上がってきていました。今回の要請が仮に日本でのバナナの販売価格の値上げにつながったとしても、現状の構造のままで、その値上げ分は企業に吸収されるだけで終わってしまうはず。バナナ生産現場の「小さな民」への状況改善のために、消費国の日本の私たちが果たすべき責任は山積みだと感じています。(野川)

ハリーナ

2022年8月号 vol.02-no.49
2022年8月1日発行

【編集者】
安藤文将
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
(APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
(tel.) 03-5273-8160
(fax.) 03-5273-8667
(e-mail) info@apla.jp
(URL) https://www.apla.jp

【印刷】
有限会社だいもん印刷

事務局だより

事務局の動き (2022年1月～2022年7月)

～1月 4日	冬季休業
2月 18日	BMW技術協会アジア交流会が開催され、フィリピン・ネグロス島のカネシゲファーム・ルーラルキャンパス (KF-RC) とのオンライン交流に寺田が運営メンバーとして参加しました。
2月 25日	パルシステム埼玉「知ろう! エシカルテーマグループ」主催コーヒーワークショップで寺田と福島が講師をつとめました。
2月 26日	理事会・評議員会を開催しました。
3月 9日	開発教育協会 (DEAR) のコーディネートによる「フリースペースえん」(川崎市) でのバナナワークショップ「知って・つくって・考えよう、バナナのはなし」で野川と福島が講師をつとめました。
3月 13日	NPO法人Wco.FPの会講座「お金の流れと食の未来-金融機関の社会的責任とは」で野川が講師をつとめました。
3月 17日	辺野古・高江を守ろう! NGOネットワーク主催ウェビナー「沖縄の米軍基地問題の解決をめざして: 環境の視点から国際社会へ発信」に主催メンバーとして参加しました。
3月 31日	梨の木舎内のアンテナショップ (東京都千代田区) をクローズしました。
4月 2日	「みつばちオーガニックフェスタ」(東京都世田谷区) にPtoP Caféで出店しました。
4月 4日、5日	疋田共同代表、事務局の野川、寺田で福島を訪問し、二本松有機農業研究会との会合に参加しました。また、バナナ募金のお届け先の保育園を訪問しました。
4月 16日	東ティモール・フェスタ2022実行委員会として、アースデイ東京に参加しました。
4月 23日	理事会を開催しました。
5月 15日	「三宿十の市2022」(東京都世田谷区) にPtoP Caféで出店しました。
5月 21日	「東ティモール・フェスタ2022」を上智大学 (東京都千代田区) にて開催。実行委員会メンバーとして参加しました。
5月 25日	日本農業経営大学校で野川が講義しました。
6月 4日	第15回総会ならびに会員交流会を対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。
6月 28日	BMW技術協会の第11回総会に野川が参加しました。

事務局からお知らせ

NPA×APLA共催講座「村井吉敬の小さな民からの発想」

●Part.4 (2021年11月～2022年1月)

講師は、谷山博史さん、日下部尚徳さん、長津一史さん、石井正子さん、鈴木佑記さん

●Part.5 (2022年3月～5月)

講師は、石井正子さん、津留歴子さん、野川未央 (事務局)、堀芳枝さん、巢内尚子さん

2022年7月からは「新時代アジアピースアカデミー」と名称が変わり、再スタート! APLAは引き続き共催講座「村井吉敬の小さな民からの発想」を担当しています。

詳細は公式サイトをご確認ください▶ <https://npa-asia.net/>

ぼこぼこバナナプロジェクトの動き

流通の過程でどうしても廃棄されてしまうバランゴンバナナの有効活用を検討・試行・具体化するぼこぼこバナナプロジェクト。色々な動きが始動していますが、それらを共有するための公開ミーティングを月に1回オンラインで開催しています。ご関心のある方は事務局までご連絡ください!



2021年12月16日から17日にかけてフィリピンを通過した大型台風22号(フィリピン名:オデット)の被害からの復興のために、バランゴンバナナおよびマスコバド糖の出荷団体であるオルタートレード・フィリピン社 (ATPI) では、日本をはじめ韓国、ヨーロッパのパートナーたちへ支援金の協力を呼びかけました。2022年6月1日時点で720万1687ペソ(約1650万円)が集まったと報告を受けています。

日本からは、倒壊した家屋の建て直しや食糧支援など生活再建に関わる支援金はAPLAの緊急災害支援準備金を活用して

台風オデットからの復興が進んでいます。

届け、農場の復興に関する支援金はATJが募金を呼びかけました。ATPIへは各パートナーからたくさんの方の支援金とお見舞いのメッセージが届けられ、生産者や現場スタッフたちからは感謝の気持ちと共に「バナナを買い続けてくれてありがとう」頑張っている」などの声が届いています。

台風被災後の生活

マスコバド糖の生産者たちも台風の被害にあいましたが、収穫するサトウキビが残っていました。一方、バナナを生産者たちにとって、出荷するバナナがないことは一時的に収入が途絶えることを意味します。

その間はサトウキビ農園や田んぼ、トウモロコシ畑で仕事をしたり、都市部の建設現場、お手伝いの仕事、魚を釣って売ったり……と、それぞれ何かしら仕事を得て生活をしていました。コロナ禍ならではの事情としては、フィリピンでは依然として学校はオンライン



生産者とスタッフたちで畑の作業中。



施肥により、よく育っているバナナ。

授業や教材を活用した自宅学習が続いているため、子どもたちの学校関連の出費が抑えられていたことも家計を助けたという一面もあったようです。

「バヤニハン」で復興にのぞむ

ATPI社長のノルマ・ムガルさんが、台風被災後に最初に産地へ行った時の話をしてい

た際に、「どれだけ民衆交易のバナナが生産者たちの暮らしを支える基盤だったのかを痛感し

者たちに肥料(鶏糞)を配布することになりました(2022年に3回実施予定)。台風以前は、限られた地域でのみ実施してきた肥料の配布ですが、今回は、村の橋が壊れたり、道路状況が悪いため鶏糞を運搬できない地域を除き全ての地域に配布しました。今年は乾季にも雨が降り、バナナの成育にとって好条件だったことも手伝って、施肥の効

果で葉っぱが元気に育ち、実の成長が早いことを多くの生産者が認識したとのこと。

バナナの出荷がないと仕事がなく、運搬を担う現場スタッフや、パッキングセンターでバナナの箱詰めをするパッカーたちも、

生産者の畑に向いて作業を担うことになりました。フィリピンには「バヤニハン」という結のような共同体での助け合いがありますが、それをバナナの復興においても意識的に実施したのです。通常の仕事がない期間に、生産者の圃場で働くことで日当が支払われました。

現場スタッフの中には自身も生産者である人もいますが、地域内で雇用されている人も多く、これまでは単にバナナを買い付けたり運搬したりするだけで、生産者のことについて知る機会がほとんどない人もいたか。今回圃場に通うことにより、単なる「仕事」から一歩進みバナナが作られる背景や生産者たちのことを知るきっかけになったようです。「生産者や現場のことを知ることが自分たちの仕事にもつながる」という意識を持つてほしいし、それをこれからも高めていかなければならない」とノルマさんは語ります。今回の台風被害は甚大だったものの、施肥の実践や「バヤニハン」の精神が、バランゴンバナナの民衆交易の現場における意識改革を促したようです。(吉澤真満子／ATJ商品部) ■

撮っておきアジア take a shot of Asia.

撮影場所

フィリピン・ミンダナオ島

Philippines, Mindanao

〔撮影者〕

石井正子／いしい・まさこ
立教大学教員



01.....1974年、フェルディナンド・マルコスSr.独裁政権下での出来事。国軍に突然自宅を襲撃され、女性は夫を失った。女性自身も小指を失い、腹部に大けがを負うが、犠牲者としては認定されていない。フェルディナンド・マルコスSr.の息子が大統領選挙に選ばれたことに、彼女はどんな気持ちでいるだろうか。

02.....フィリピンでは、どの村にもあるサリサリ・ストア(小さな雑貨店)。最近ではWi-Fiのサービスも売り出した。10ペソ(約25円)で2～3時間つなぐことができる。若者はTikTokなどに夢中。

03.....家族そろってのラマダン(断食月)明けの礼拝。子どもたちはじっとしていられない。何を話しているのかな。

04,05.....青いココナツの実を刈り取る作業。子どもたちも上手。



ハリーナ HALINA

2022年8月号 vol.02-no.49 2022年8月1日発行 頒価 300円(税込)

〔編集・発行〕

特定非営利活動法人APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F

〈tel.〉03-5273-8160 〈fax.〉03-5273-8667 〈e-mail〉info@apla.jp

〈URL〉<https://www.apla.jp>

APLA

検索

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって
APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、サポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

